

*The New Oxford Shakespeare* (2016年刊行、以下 *NOS* と略記) は、シェイクスピアの共作について従来の現代版には見られない大胆な作者判定を前面に押し出した全集である。その判定に基づいて、例えば *Arden of Faversham* が、あるいは *Spanish Tragedy* (1602年版) に付加された台詞がシェイクスピアの共作として「正典」の地位を与えられ、全集に収載された。*NOS* の編纂方針は、*NOS Authorship Companion* (2017年刊行、以下 *AC* と略記) に詳説されている。その作者判定を支えているのは、コンピューターを利用した計量的文体解析である。計量的文体解析作者判定とは、言語データを統計的に分析して作者判定を行うことであるが、*NOS* はこの統計学的な解析方法によって決定的な作者同定を達成したかのような議論を展開している。しかし *NOS* の解析はさまざまな問題を孕んでいて、その作者判定に信を置くことはできない。本発表では、在野のシェイクスピア研究者 Pervez Rizvi (本業は、数学の学位をもつコンピュータソフト開発者) が構築した、初期近代イギリス演劇連語データベースを用いた検証結果を傍証として、*NOS* の作者同定の問題点を指摘した。

## 1. *NOS* の作者同定の問題点

(1) *NOS* は統計学的な文体解析を作者判定の権威付けに利用している。*NOS* は様々な統計的分析方法によって作者同定を試みている (Delta, Nearest Shrunken Centroid, Random Forest, Zeta, Principal Component Analysis, Shannon Entropy, Fisher's Exact Probability Test, etc.)。これらの分析方法は、一般の文学研究者には難解で、その可否を判断することは困難である。しかも、その難解な方法が作者同定のために適切に用いられているとは思われない。*NOS* の学者たちは、自説を補強するために統計的解析を「誤用」(あるいは「悪用」) しているように見える。

*NOS* は、特に「フィッシャーの正確確率検定」(Fisher's Exact Probability Test) による権威付けを得意としているようである。これは、*NOS* の編集主幹の Taylor がしばしば (自説の正しさを担保する神託のように) この検定を引き合いに出すことに端的に現れている。(Taylor, "Sleight of Mind: Cognitive Illusions and Shakespearian Desire," Bourus and Taylor, eds., *The Creation and Re-Creation of Cardenio*, p. 157; "Who Wrote the Fly Scene [3.2] in *Titus Andronicus*?" *AC*, p. 79; Taylor and Nance, "Imitation or Collaboration? Marlowe and the Early Shakespeare Canon," *Shakespeare Survey*, vol. 68, pp. 32-47. p. 46)。*AC* 所載論文の中では、他に Loughnane の論考も *All's Well* にミドルトンの筆が入っていることを立証するためにフィッシャーの正確検定結果を援用している ("Thomas Middleton in *All's Well that Ends Well*? Part Two," *AC*, p. 319)。しかし彼らの解析を子細に検討すれば、解析者たちが「独立検定」を誤解しており、彼らが算出した「確率」に基づく作者判定結果が妥当性を欠くことは明白である。

*NOS* の学者たちは、さまざまな統計学的な作者判定方法を使っているが、使用されている方法によって作者判定の結果が食い違いを見せることがある。彼らはその食い違いについては大体において沈黙しているが、時には自分たちの都合に合わせて解析結果を取捨選択している。例えば *3 Henry VI* の Delta テストの結果は、他の解析結果と一致しないので退けられている (*AC*, p. 202)。しかし *Arden of Faversham* の解析では、解析者は Delta テストの結果を、この劇がシェイクスピア作であることの根拠の一つとして積極的に利用している (*AC*, pp. 172-74)。このような恣意的な解析結果の選択は、*NOS* の作者判定全体に対する信頼性を損なってしまう。

(2) ターゲット (作者判定対象戯曲) と比較検証をするためのテキストの選定が不適切である。例えば Elliott と Greatley-Hirsch はシェイクスピアを *Arden of Faversham* の作者の最有力候補と判定しているが、その判断の根拠となったデータはシェイクスピアの初期の4作品 (*Gent, Shr, R3, Err*) から抽出されている (*AC*, pp. 142-44)。しかし多数のシェイクスピア作品の中からなぜこの4戯曲をサンプルとしたのかの説得的説明がない。比較対照 (コントロール) テキストが異なれば判定結果も変わる可能性があるが、その検証が不十分である。*NOS* の学者たちが判定に使用している統計学的な解析——例えば Zeta テストや主成分分析——は比較的信頼度の高い解析方法であると思われるが、いかに優れた解析方法を用いても、判定のための標本テキストの選択が不適切であれば、信頼できる判定結果を得ることはできない。

(3) 解析のための言語データの抽出方法が不合理である。例えば *Arden of Faversham* の解析において Jackson は作者判定データを抽出するために、シェイクスピア・マーカ-5語 (Shakespeare-plus-words: gentle, answer, beseech, spoke, tonight) と非シェイクスピア・マーカ-4語 (Shakespeare-minus-words: yes, brave, sure, hopes) を選定している (*AC*, pp. 184-85)。Jackson は先行研究を参考にしてこれらの語を選んでいるが、なぜこれらの9語を選択したのかの (印象批評的な選択基準の説明はあっても、統計学的に見て) 説得的な説明はなく、また

なぜ両マーカー語合わせてわずか9語で十分であるのかの説明も見えない。

NOSの研究者集団には、統計学に詳しい人が含まれている。ACにTaylorとの共著論文“Who Wrote the Fly Scene (3.2) in *Titus Andronicus*?” (pp. 184-85)を寄稿しているDouglas Duhaimeは、コンピューター・ソフトウェアの開発者である。またHugh Craigは、言語の統計処理に詳しい研究者である。A. F. Kinneyとの共編著*Shakespeare, Computers, and the Mystery of Authorship*は、統計学を知らない学者でなければ書けない論考である。他にも統計学に詳しい学者がACに寄稿している。統計学に通暁した彼らが、Taylor(および論文の共同執筆者)の解析データの採集方法が不適切であるだけでなく、フィッシャーの正確検定の不適切を知らないとは考えにくい。NOSチームの統計学に詳しい研究者がTaylorの一知半解の統計処理をなぜ黙許しているのか、不思議である。

## 2. Pervez Rizviの初期近代英国演劇連語データベース、NOSの作者判定の不適切

Rizviは2017年から2018年にかけて「初期近代英国演劇連語データベース」をウェブサイトに公開した(URL: //shakespearetext.com/can/)。これは1552年から1657年までに執筆された計527編の戯曲間連語一致を、Rizvi自身が作成したコンピューター・プログラムによって網羅的に調査・カウントして構築した膨大なデータベースである。このデータベースを用いてシェイクスピア、マローウ、リリー、フレッチャー、ジョンソンその他の戯曲の作者判定を行い、その判定結果に基づいて次のように指摘した。

- (1) 判定資料を抽出する作品の選択によって作者判定順位は容易に変動する。
- (2) 解析方法の選択によって作者判定順位は容易に変動する。
- (3) 語数の少ない場(scene)や台詞について精度の高い作者判定は困難である。
- (4) ほとんどの作家のコーパスには、その作家の他の作品とは作風の違う「変則的」な戯曲が含まれているために、完璧な統計学的作者判定は本来的に困難である。
- (5) 戯曲以外のジャンルから抽出されたデータを含む判定資料を用いると、戯曲のテキストの作者判定の精度が低下する可能性が大きい。

NOSの学者たちによれば、上記(1)～(5)の問題が存在しないかのようなようである。自分たちが選定したテキストから得られたデータに基づいて、そして自分たちの選択した解析方法によって、あたかも普遍的な結果が導き出されるかのような議論を展開している。時には10語に満たない言語サンプルから得られたデータに基づいて、あるいはわずか1編～数編のコーパスしか存在しない作家についても確信的に作者判定を行っている。別の作品グループを選択し、別の言語資料を用いて、あるいは別の解析方法を用いて判定すれば異なる結果が得られるかもしれない可能性は、NOSの検証の埒外に置かれている。短い場についても積極的に作者判定を試みている。無謀としか言いようがない。NOSの研究チームが、他のサンプル、他の言語資料、他の解析方法による解析でも、彼らの結論が導き出せることを立証しないかぎり、どれほど強力な統計学的判定方法を用いても、その作者判定結果を信頼することはできない。

シェイクスピア時代の戯曲は共作が非常に多く、計量文体解析に必要な、十分な量の単独執筆テキストを確保するのが難しい。シェイクスピアは27編(約62万語)の「単独執筆作品」が現存するので、比較的安定した言語データを抽出できるが、シェイクスピアと同世代の劇作家でこれだけの語数のコーパスを確保できる作家は存在しない。例えばマローウは約10万語、リリーは約11万語である。キッドのコーパスは約4万語であるが、これにはキッドの(オリジナル戯曲ではない)英訳戯曲と(キッド単独作の確証がない)*Soliman and Perseda*を含む。わずか1作品がその作者のコーパスというのも珍しくない。作者不詳の戯曲も多数存在する。シェイクスピアはほとんど例外的に27編の単独執筆とされるテキストが確保できるが、そのテキストが100パーセントシェイクスピアの手によるのかどうかの確証はない。芝居の脚本であるから、劇団関係者が加筆している台詞も含まれるかもしれない。またシェイクスピアの初期(と晩年)については共作が多く、十分な量の解析基礎資料(単独執筆作品)を確保するのが困難である。シェイクスピアの初期作品と同時期に書かれた*Edward III*や*Arden of Faversham*をシェイクスピアが書いたかどうかを計量文体解析によって判断する難しさの理由の一端はここにある。しかも作者の平均的語法から逸脱する「変則的」作品もある。こういう状況であれば、いかに弁別力の高い解析方法を用いようとも、計量文体解析による作者同定には限界があることは明白である。そのような限界を無視する、あるいはそのような限界が存在しないかのようなNOSチームの作者判定には問題があると言わざるをえない。NOSの学者たちの作者同定論考は随所に、シェイクスピアと同時代の劇作家との言語的連関に関する興味深い示唆を与えてくれる貴重な文献ではあるが、その作者判定は「健全な疑いの目」(Freebury-Jones, “When a man hath a familiar style,” *ANQ: A Quarterly Journal of Short Articles, Notes and Reviews*, vol. 33, no. 2-3, p. 119)をもって見る必要がある。